通信第三十一号　　弥陀たのむ一念のとき

　前回の通信から三か月が過ぎました。十一月、十二月はかってない程忙しい日程でした。岐阜・大阪・高岡・大分市・福岡・大分の庄内と場所が変わりました。また、その間に葬儀や法事、お月忌があります。一日一日ご縁のたびに仏様のおりとお育てのおきにわせていただきました。お訪ねしたご自宅や布教先のお寺様の床の間によく、曽我量深先生の書が掛けられてあります。決して字がうまいようには見えません。ところが何か響いて来ます。書と一体と成られた法蔵菩薩様の願いが伝わってきました。住職さんの説明を聞きながら新しい出遇いをさせて頂いたことであります。

　一貫して流れていたのは「の一大事」の問題でした。我執の問題が第一の関所とするなら、法執は第二の関所の問題です。昔の熱心な同行さん方が「薄紙ひとつがあきらかにならない」として求道聞法された関所です。そこでの苦闘が大事な問題です。しかし、そこを問題にすると「わからない」という感想が出てきます。解りやすいお話をしてくださいという要望も出てきます。聞法を重ねないとこの問題は起こって来ません。また深い悲しみや悩みがあると反応があります。私の中の法蔵菩薩さまはそういうところに反応されるようです。我執も法執も出どころは無明の人間の計らいからです。後生の世界は出どころが光明からです。本願からです。すなわちお念仏からであります。「後生の一大事」というお言葉を宿帳に書かせて頂くと法専寺の住職さんが「なつかしい言葉だな」ともらされました。

　正観寺様の報恩講のおわりに、本堂から「」（蓮如上人六十三才のときの作、聖人のい立ち

と報恩講におけるご門徒の心得が説かれているお文様です）の拝読の声が聞こえて来ました。聖典を開

いて見ると「一念帰命の信心を決定せざらん人々は、そのあるべからず」とあります。

報恩講中に信心を頂こうとしてご参詣している人はきわめて少ないのではないか。またそれに自分は

えているだろうか。「ご門徒さんに信心の人が生れないと死ぬに死んでゆけない」といわれた住職さんのご挨拶がこころに残っています。また昨夜の座談会で言いにくい子供さんの問題を話されたご門徒さんのことなどがこころによぎります。ふと左ページが目にとまりました。そのご文は蓮如上人の作であると言われている「」です。

　　もろもろの雑行・雑修、自力のこころをふりすてて、一心に「阿弥陀如来、我等が今度の一大事の後生御たすけそうらえ」とたのみもうしてそうろう。**たのむ一念のとき、**・御たすけとぞんじ、このうえの称名は、御恩報謝とよろこびもうしう。～～～このうえはさだめおかせらるる御おきて、一期をかぎりまもりもうすべく候う。

蓮如上人は形骸化し弱体化した本願寺を信心の教団としてらせたお方であります。蓮如上人をし

て突き動かしていたご信心の表現が右のご文章であります。ただし、私は「弥陀たのむ一念」が発起していないときは終わりにあるお言葉「この上はさだめおかせられる御おきて、一期をかぎりまもりもうすべき候う」という表現に何かしばられるような感じがして敬遠してきたのでした。この一文の背景には当時の教団の事情があったのでしょう。

　さて、「弥陀たのむ一念のとき」とはどういう事なのか。逆にいえば弥陀をたのまないということは

どういうことなのか。日常私は何をたのみ、りどころとしているだろうか。自分の思いや経験や得意

とすることをたのんでいます。世間で人より得意とすることが「弥陀をたのむさまたげ」となり、これ

だけはどうにもならない弱点や悲しみが「弥陀たのむご縁」となります。大石先生は「どうにもならん

から本願にたすけられる。どうにかなったら助けられない」と言われました。それを人に言ってきまし

た。そして、自分はお念仏が口から出ているのでたのんだつもりになっていました。しかし、母に通じ

ませんでした。次男からは厳しく追及され責められました。その背後に何が願われていたのでしょうか。

今でもいつもそうであります。

私の得意とすることは何だったのか。「教法を大事にする。聞法する。念仏申す」ということでした。

このことのために私はがんばってきました。そして自分の得意とすることを話題とし、人に押し付け、

人を見下げてきたのです。この姿勢が「弥陀たのむ」ことをさまたげていたのです。全くの盲点です。

致命傷です。「この一大事に気づけ」と如来様が娘や次男や母またあらゆるご縁の中で呼びかけていた

のです。今も呼びかけられているのです。

　　真実信心の称名は

　　　弥陀廻向の法なれば

　　　不廻向となづけてぞ

　　　自力の称念きらわるる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

念仏（自力の念仏）が「弥陀たのむ一念のとき」の妨げとなっていたとは。如来様に、皆さまに申し

訳ないばかりです。しかし、力みが抜けます。またこれは私の生涯の問題であります。わかったこと、知ったことをすぐってしまう。俺は知っとる、わかった、見つけた、やっているとすぐに舞い上がりきた法のおきを妨げてしまうのです。罪悪深重、誹謗正法のであります。法執ののすがたであります。ここを照らされるときが私の「弥陀たのむ一念のとき」であります。白紙に帰らされるご利益であります。

我執、法執の私からはお浄土へ一歩も進めません。しかもすでにお浄土の中にありながら。曠劫より

逆らい疑い続けて来たのであります。如来様は決して捨てることなく常に寄り添いたまい願い続けて来て下さって来たのであります。今も摂取不捨続けて下さっているのであります。

弥陀成仏のこのかたは

今に十劫をへたまえり

法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　浄土和讃

さて、私の弱点とすることは何か。母のこと、子供のこと私の病のことでした。人と話しているときこの話題がでなければと思うことがあります。この苦悩のお蔭で先生方に出遭わされました。私から「

弥陀をたのむ」ことは絶対に不可能のことであります。感情や学識、知識教養、地位、お金ではどうに

もなりません。人間からできることではありませんから、如来様が人を使い、事件を起こさせて、弥陀

たのむ状態にまで追い詰め、落としめて下って、死んでもたのまないと力む私に、たのませてくださる

のであります。背後に如来様のご苦労があります。このことは逃げずに聞法を続け、よき人のおおせを

こうむり続けないとなかなか受け入れがたい事実であります。聞く力も受ける力もまして信じる力も自

分には無いのですから。そこがあきらかにならないと自分が残ると申しますか。我執、法執の臭みとい

いますか、垢が残るのです。我執のはからいが消えないからであります。蓮如上人は「水に入りて垢お

ちず」（御俗姓）とおおせられています。この課題に悪戦苦闘が長く続くのであります。浄土真宗が聞

法を大事にすることがそういうところにあるのではないでしょうか。聞法の姿勢を大石先生が厳しくさ

れたのもそこに問題があったからではないでしょうか。

ここで頂いたお便りを紹介させていただきます。

　　この度は三十号をお送り頂きまして有難うございました。これまでもずっとお送り頂いておりましたのに礼状もよう書かずに失礼致しました。誠に申し訳ございませんでした。この度も尊いお便り頂き誠に有り難く繰り返し何遍もご縁にあわせて頂いております。真剣に道を求められる尊い常照様のお姿に胸があつくなります。私は来月になると九十六才になります。耳は遠くなり眼は見えくなり頭もぼんやりしてきまして思うように気持ちを充分に表現することが出来ませんのでお許し下さい。どうぞお身体に気をつけられてお元気にお過ごし下さい。

　法喜様によろしくお伝え下さい

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　又、次の通信をたのしみに致しております

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　池田　寂光

寂光様は大石先生の妹様であります。いつも襟をただされるお手紙をいただきます。数年前、京都のご自宅をお訪ねした時、お内仏の横に障害のあられた息子様のお写真が、ありのままのお姿でかざられていました。不思議に印象に残っています。

　三重県からは内田万吉（万葉）さんのお便りがありました。高齢のため住所等は代筆です。志の字は

ご本人です。

　南無阿弥陀仏　　　万葉

　大きな字ではありませんがゆっくり震えながらしっかりと書かれています。心が伝わって来ます。深

い念仏者の世界です。早速返事を書かせて頂きました。書かせて頂いて気づかされました。

　万葉様の字を拝しつつ書かせて頂いています。眼に浮かぶのは七十才代の透きとおったお顔です。聞

光洞へ森愚英さんと遅れて行ったとき、万葉さんの「待っておったんぞ」という声の響きが残っていま

す。その時は強く待っていて下さったのだなと軽く思っただけでしたが、今、思わさるるに、あれは如

来様の曠劫以来待って下さっていた浄土からの声だったのですね。曠劫以来という如来様の願いがかす

かに感じさせて頂ける不思議さ、有難さ。すがた形が無いのに如来様のおきが味わわされる御恩。

先生方、同行様方、皆々様方そして如来様のおかげであります。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　まずはお礼まで　常照

「歎異抄」の第一章

　　弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨のにあずけしめたまうなり。

　弥陀たのむ一念のときはどれだけ時代が変わろうとも変わりません。古びません、時代を超え、民族

を超え無限と一つに溶け合った世界です。川が海に引き寄せられ海に帰ると川の名前は消えるごとく、

如来さまに摂取された世界であります。無量寿に帰るときです。一念帰命とも信の一念ともおおせられ

ています。

　「御俗姓」には

　　たのむ一念のとき、往生一定・御たすけ治定とぞんじ、このうえの称名は、御恩報謝とよろこびもうし候う

　大石先生が「念仏はお礼です」といわれたことがようやく味わされます。令和二年は先生の十三回忌

です。それぞれのご縁の方々の生長があります。私自身これからという感じがします。よろしくお願い

申し上げます。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照

　令和元年十二月末日

　毎月二十八日の例会、聞光道は午後一半よりです。

来年は住職交代です。如来様にお仕えさせて頂くことに変りはありません。

追信

　書き終えてから車中で藤解照海先生の法話テープを聞かせて頂いていますと「凡夫は自分で自力を捨てることができないから如来様が自力を捨てさせて下さる」との教えでした。形の無い如来様が不思議にも全否定されてというか、南無阿弥陀仏という形に顕れて下されている。出世間の真実の世界、光の世界から出て闇の不真実の私に南無阿弥陀仏とあらわれて下さっている。真実に帰れる、光に帰れる。

　　　聖人のおおせには、～～「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「歎異抄」

　有難かったので追加させて頂きました。